

COLUMN

旅

木々の騒ぐ森の中を抜け、山道を登りきると、小さな教会が目の前に現れた。こんなところに教会が？ 人気は何もないけれど、入ってみるとどこも清潔に磨き上げられている。誰かの手で毎日大切に手入れをされている様子が一目でわかるのに、やはり人の気配はどこからも感じられない。鮮やかな明るい彩りのステンドグラスからは、温かい昼の光が射し込み、十字架に掛けられたキリスト像を照らしている。もう一度外に出てみると、教会のまわりにはそれを大切に守ろうとするかのように、そして、教会の入り口で優しく微笑むマリア像を見上げるように山の斜面に点々と農家がたっている。よく見ると、その一つに小さくしゃがみこんだ老婆が黙々と畑仕事をしているのに気がついた。こんなに人気のないところでは、こちらの様子が気にならないわけではないけれど、彼女は決して顔を上げようとはしない。むしろその背中はこちらを強く拒否し、監視し、去っていくのを待っているかのように。その老婆の様子に、この何日もの間に会ったことが思い起こされた。ここも昔は隠れキリシタンの村だったのだろう。何百年もの間、迫害に苦しみながらも守り続けた教えを信じ、苦しみから解放された今の暮らしの中にもまた、その教えが息づいているのだということが、この磨き上げられた教会と、老婆の背中から感じられた。今でも、見知らぬよそ者を恐れ、不信を抱いているにせよその教会には、誰をも許し、迎えてくれる天国というものを信じさせてくれるような穏やかさと、安らいだ時間が流れているようだった。彼女の邪魔にならぬようその場を去った私は、この旅の中で同じような光景に何度も出会うことがあり、この今の日本の中に温かな教会を守り、小さな村や島で一生を暮らす人たちがいるのを知った。

1997年 9月 長崎から平戸への旅にて

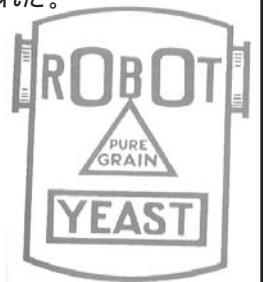
中島通信

1960年代のこと

YOUR EXTRA MILEAGE, SIR!



1960年代、日本はまだまだ貧乏でしたが、今思うとなんだかとても夢のある時代でした。日本風に言えば、昭和30年代、町並みはセピア色で朝起きると納豆売！や豆腐売！が悲しげな笛を吹きながら売りに来るし、道端は水溜まりだらけで、夕闇の町をチンチン電車やボンネットバスがガタガタ走りまわる。今思うと、懐かしいけどわびしかった。そんな風景の中で、アメリカ製のものは何だって輝いて見えた。コココーラだってハンバーガーだって、ポップコーンや、ポパイやオリーブ、フェニックス君も大好き。いつか映画で見たマリリン・モンローみたいに、お風呂の中でシャボン使ってバスタブを泡いっぱいにしてしかもお風呂の中でシャワーを浴びるなんてどうしてあんなことできるんだろう？ どんなものなのか試してみたくなって、うちの捨のお風呂の中に石鹸持ち込んで、バケツの底に穴いっぱい開けてシャワーの気分出してみたけれど、泡なんか全然立たなくてお湯がうすら白く濁っただけ。あてが外れた。シャワーだって、全然雰囲気でなかったし、おまけに母親に見つかって、滅茶苦茶叱られた。でも何日かしたら怒られた理由がよく分かった。その捨のお風呂は洗ってもしばらくの間いつも濁ったままだったから・・・多分お父さんには黙っててくれたんだろうな。かっこいいトスターや大きな冷蔵庫、ハイウェイを飛ばす平べったい車。夢みたい・・・でも大人になってアメリカに行ってみたら日本製の車ばかり。それに憧れたキャラクターグッズは、当時日本で作っていたものが多かった様で、裏に、メイドインジャパンで書いてあるアメリカ製のアンティークを結構見かけます。それでも、誕生日にバービー人形をもらった嬉しさはやっぱり忘れられない。



アンティークと生活雑貨市 2月2日土曜日 ミレコホールにて 朝1時より

